

## 優秀作品賞

「伯母さん、お父さんありがとう」

古田 知子さん

伯母は二十数年前でガンで亡くなった。

父のたった一人の姉は美人でおしゃれな女性だった。自分にも他人にも厳しかったので、私は伯母の前では常に行儀のいいおりこうさんでいた。結婚後まもなく夫に先立たれて以来独り身を通したが、子供がいなかったため、甥の兄と姪の私には厳しい顔だけでなく時おり「あんた達が一番可愛か」と溺愛もした。しばしば亡くなった夫の実家に出かけては山のようにお土産を抱えて我が家にやってきた。その福岡詣では病気を発症するまで続いた。私達兄妹への土産はいつもわか煎餅と鶴の子と決まっていた。母が普段より念入りに掃除し始めると伯母は福岡から帰ってきた。「百江伯母ちゃん早く来んかなあ」と毎回楽しみに待った。来たら二、三日泊まるのだが、母は手の込んだ料理でもてなし、だらだら晩酌する父にグチグチ口出ししないどころか、言われる前に爛をつける姿は可笑しくもあった。兄と私も遅くまで起きていても叱られず、土産のお菓子も食べ放題だった。母の本心はどうだかわからなかったがみんな機嫌が良かった。飼っていた猫まで高い刺身を分けてもらえるからか、伯母の膝に頭をこすりつけていた。ただし、布団でうとうとし始めると、民話や童話ではなく怖い話をするのは閉口した。伯母は私を怖がらせては嬉々とした顔で「怖いけど、本当の話とよ」と止めを指した。

時が経ち、私は結婚して長男を出産し子育てに奮闘していた頃、突然母から伯母がガンにかかり日赤病院に入院したことを聞いた。息子を連れて何度か顔を見せに出かけたが、舅姑と同居していたため、そのうち伯母への見舞いも疎かになってしまった。数か月ぶりに病院を訪れると美しくふっくらした顔はすっかり痩せこけて、現実を受け入れがたかったが、それ以上に無理しても来るべきだったと申し訳なさでいたたまれなかった。伯母はその後も入退院を繰り返した。最期のほうは何か言いかけては痛みで顔がひきつり、聞き取ることができなかった。

後日、父から「百江伯母ちゃんからお前達にと通帳を預かっつとる」と、兄と私に一冊ずつ手渡された。伯母は質素な暮らしの中で私達のために少しずつ貯めていたのかと涙が止まらなかった。その二百万円程の貯金には伯母の思いが溢れていた。夫に相談して、軽々しく使えるものではないから、そのまま形見として父に預かってもらうことにした。今やガンは二人に一人がかかると言う。しか

し、早期発見すれば治る可能性も高い。伯母も私達にお金を残そうとせず、自分自身のために検診を受けていれば発見が遅れることもなかったかもしれない。

四年前、大好きな父が寝ついてしまった。胃腸の機能低下で次第に痩せていき、大きな病院で検査を受けた。肺ガンで余命三年と宣告され、またも後手に回ってしまったことに打ちのめされた。父は預けていた伯母からの通帳を「お前が持つとけ」と私に返した。残された時間が少ないことを分かっていたのだろう。父らしく、亡くなる数日前まで母にも私達子供にも孫達にまでも冗談を言って笑わせてくれた。最愛の父親の死を経験して、やっといつ病に冒されるかわからないこと、早期発見早期治療がいかに大事か、自分のこととして考えられるようになった。情けないが、一番身近な人間がガンになるまで病気の恐ろしさも死ぬことの現実味を深刻に受け止めてなかったのだ。やっと目が覚めた思いだ。

伯母の残したお金の使い道が二十年経って決まった。私夫婦で毎年人間ドックの費用に充てようと夫に話すと、「きっと伯母さんもお義父さんも喜んでくれるね」と賛成してくれた。あれから今年で四回目の人間ドックを夫婦で受けた。夫は胃、私は泌尿器科の精密検査を検診で指示されたが、結果は経過観察でほった。毎年ドキドキしながらも夫婦ドックを受けに行っている。

検診の大切さを痛感させてくれた伯母に父に今、心から感謝している。